

# ジャカルタにおける社会空間と都市空間の政治化— 「指導される民主主義」体制前後における「伝統」の変容と首都の「創造」

小林 和夫

## はじめに

本論の目的は、「指導される民主主義」<sup>1)</sup>体制の前後に、インドネシアの首都ジャカルタの社会空間と都市空間が政治化された経緯をあとづけることである。

議会制民主主義から「指導される民主主義」に移行する包括的な歴史的過程については、ハーバート・フェイスの研究 (Feith 1962) を嚆矢としてこれまで数多くの研究がなされてきた。また、「指導される民主主義」に移行する過程のなかで、スカルノがゴトン・ロヨンという「伝統」にさかんに言及したことや、象徴操作のために首都ジャカルタにさまざまな建造物を配置し、権力の示威をほどこしたということについても数多くの研究がある (Feith 1963 ; Weatherbee 1966 ; Willner 1966 ; Geertz 1968 ; Anderson 1973)。

しかし、「指導される民主主義」への移行期の前後に、スカルノが「伝統」を鼓吹した時代と同じくして、スカルノの腹心だったジャカルタ市長・スディロが住民組織を再整備する際に、首都ジャカルタで「伝統」の復興をこころみたこと、スカルノが首都ジャカルタにさまざまな建造物を配置し、権力の正当性を都市空間に演出したことを、連続的にとらえ、再解釈をほどこした研究はなされていない。

上述の先行研究状況をふまえて、本論では、スカルノとスディロの歴史的営為を、それぞれ首都ジャカルタにおける「都市空間の政治化」、「社会空間

の政治化」ととらえなおして論じてみたい。本論の構成を示す。1では、インドネシアにおける独立揺籃期と1950年代の政治状況を略述する。2では、「指導される民主主義」体制への移行を目前にして、ゴトン・ロヨンという「伝統」が変容していく過程をスカルノの演説からあとづける。3では、1950年暫定憲法から1945年憲法への回帰が、ゴトン・ロヨンとともに頻繁に言及（Weatherbee 1966：27-28）された「協議」と「全会一致」という背反する論理の克服によるものであることを示す。4では、首都ジャカルタでも、スカルノの腹心だったスディロ市長によって、RT/RKの再整備に際して「伝統」の復興が叫ばれ、都市の社会空間が「指導される民主主義」体制に親和的に政治化されたことを述べる。5では、スカルノの象徴操作によって都市空間が「指導される民主主義」体制に適合的に政治化されたことを示す。結語では、本論の知見をまとめる。

## 1. インドネシアにおける独立揺籃期と1950年代の政治状況

インドネシアは1945年8月17日の独立宣言後、1949年12月27日のハーグ協定の発効によるインドネシア連邦共和国への主権委譲を経て、1950年8月15日の単一のインドネシア共和国発足まで、国内外のさまざまな政治問題を解決しなければならなかった。まず、再植民地化をめざすオランダが1947年6月と1948年12月の2度にわたって軍事侵攻を行った。そして、それに対する当事国オランダをはじめ国際社会との外交交渉が必要であった。また、国内的には、1946年の7月3日事件、1948年9月18日のマディウン事件、1949年のダルル・イスラームのイスラーム国家樹立宣言、1950年4月の南マルク連邦共和国の独立宣言などを経験し、国内の政治情勢と治安は断続的に不安定であった。

こうした国内外の諸問題を解決して1950年に発足した単一のインドネシア共和国は、暫定憲法を制定し、自由主義的な議会制民主主義を採用したが、多数の小政党の代表者を入閣させなければ政権が維持できない政治状況にあった。そのため、1949年12月成立のインドネシア連邦共和国第1次内閣から1957年3月に総辞職した第2次アリ・サストロアミジヨヨ（Ali

Sastroamidjojo) 内閣まで実に7つの内閣が組閣されたが、2年以上継続した内閣は存在しなかった(日本国際問題研究所・インドネシア部会 1972: 589)。

以上から、独立揺籃期を経たインドネシアの1950年代における各内閣の政権基盤はきわめて脆弱だったことが確認できよう<sup>2)</sup>。

## 2. 「指導される民主主義」体制への移行と「伝統」の変容

1952年の「10月17日事件」<sup>3)</sup>を契機として、政党・政治指導者・国軍の間にスカルノを巻きこんだ対立が激化すると、スカルノの政治姿勢は次第に「指導される民主主義」体制へと傾倒していく(Sundhaussen 1982: 71-3)。この「10月17日事件」は、スカルノに憲政という議会制民主主義の限界という懸念をもたせることにつながっていく。その結果、議会制民主主義はインドネシアの政治状況に適合しないとして、スカルノは議会制民主主義の非難や解散を頻繁に口にするようになっていくのである(Penders 1979: 145)。

そして、1953年6月にウィロボ内閣が総辞職し、政権の運営をめぐる三者のあいだでさらに激しい権力闘争が繰り広げられるようになると、スカルノは「パンチャシラの誕生」(Soekarno [1945] 1947)で国是であるパンチャシラ(五原則)を縮約するものとして提示して以来、ほとんど言及していなかったゴトン・ロヨン(演説)を頻繁に引用するようになる<sup>4)</sup>。だが、その引用は「パンチャシラの誕生」(Soekarno [1945] 1947)で展開した新生国家の団結を説く広義のスローガンとしてではなく、激しい権力闘争に終止符を打ち、みずから志向する「指導される民主主義」を正当化する「伝統」という文脈のなかで用いられるようになっていくのである<sup>5)</sup>。

これまでの先行研究では、憲政期から「指導される民主主義」体制への移行を決定づけたスカルノの重要な演説は、1957年2月21日の「スカルノ構想」にあるとされてきた(Legge [1972] 2003: 300-1, Penders 1979: 156)。この「スカルノ構想」によって、「指導される民主主義」の採用が公式に表明されたという指摘については異論をはさむ余地はない。しかし、「スカルノ構想」が発表された時期よりさらに遡ってスカルノの言説を精読

してみると、「指導される民主主義」体制への移行の意志はすでに1953年の独立記念日演説「歴史の原動力となれ」のなかに胚胎していたことが認められる。以下にその一部を引用してみよう。

インドネシアの民主主義は、みずからの形態や様式を模索している過程にある。インドネシアは、一般にいう民主主義原則の普遍的要素のほかに、インドネシア民族自身の政治生活の精神と韻律にもとづく特別の要素を見つけださなければならない。(中略)。「過半数をひとりでも超えたら成立」という方式を用いる西欧民主主義はゴトン・ロヨンや団結の精神とは韻律が合わない。ゴトン・ロヨンと団結の精神は、対立、反対、敵対などを引き起こすことを欲しない。(Soekarno [1953] 1985 : 182-3)

この演説からわかるように、スカルノは「指導される民主主義」の採用をゴトン・ロヨンという「伝統」によって正当化している。その正当化の根拠として、ゴトン・ロヨンの話し合いの精神が連綿と継承されてきたインドネシアでは、対立、反対、敵対を前提とする多数決原則にしたがう西欧の民主主義は適合的ではないと述べている。スカルノは、当時の政党・政治指導者・国軍のあいだの激しい対立の原因を、ゴトン・ロヨンという「伝統」をもつインドネシアにはほんらい合致しない多数決を原則とする西欧民主主義に求めているのである。そして、スカルノは、この対立の解消が西欧民主主義の原則にインドネシアの特殊性を加味すること、つまり、「指導される民主主義」の採用によってなされると主張した。

上述のスカルノの「指導される民主主義」への意志は、1957年の「スカルノ構想」によって明確に表明されることになる。スカルノは「スカルノ構想」のなかで、ゴトン・ロヨン内閣<sup>6)</sup>と国民評議会(Dewan Nasional)の設置を具体的な柱と定め(Ghoshal 1982 : 80)、ゴトン・ロヨンを次のように位置づける。

内閣については、われわれはゴトン・ロヨン内閣を組織すべきである。

私がことさらにゴトン・ロヨンという言葉を用いるのは、この言葉がインドネシアの精神を最も純粋に反映する真正なインドネシア語であるからである（日本インドネシア協会 1965：419）。

スカルノは、ゴトン・ロヨンを「インドネシアの精神を最も純粋に反映する真正なインドネシア語」と述べている。しかし、ゴトン・ロヨンという語彙そのものは、各種の辞典には1900年代初期から1930年代にかけて収録されたものであった（梶沢 2004：6）。また、日本占領期にもインドネシア語委員会によってゴトン・ロヨンは新語のひとつと位置づけられていた（*Kan Po* No. 37：31）。このような事実にもかかわらず、スカルノはゴトン・ロヨンをインドネシア精神がもっとも反映していることばであると主張している。このスカルノの主張は、ゴトン・ロヨンが、まさに、ホブズバウムが定義した「容易には辿ることはできないが、日付を特定できるほど短期間—おそらく数年間—に生まれ、急速に確立された『伝統』」（Hobsbawm 1983=1992：10）であったことを証明している。そして、スカルノはゴトン・ロヨンという語彙の意味について以下のように述べている。

ゴトン・ロヨンの意味を外国語で説明するならば、「家族の全員が例外なくテーブルに就き、食卓に就き、そして仕事机に就き」ということである。これがインドネシア人のゴトン・ロヨンの表現であり、インドネシアの個性の表現なのである（日本インドネシア協会 1965：419）。

スカルノはゴトン・ロヨンをインドネシアの個性と位置づけて、比喩を用いて説明している。ここで、用いられている「家族の全員」という比喩が、インドネシア国家という家族を政治的に構成する全政党を意味することはいうまでもない。つまり、「家族の全員が例外なくテーブルに就き、食卓に就き、そして仕事机に就き」とは、当時、閣外にあったインドネシア共産党も含め、国家の全政治勢力を結集させて、挙国一致体制によって国政の遂行にあたることを意味している。

そして、「スカルノ構想」では、既述の1953年の独立記念日演説「歴史の原動力となれ」と同じように、まず、1950年の暫定憲法以来の議会制民主主義が西欧型の輸入民主主義と批判されている。その批判の根拠として、スカ

ルノがあげているのは、やはり議会制民主主義と本源的なインドネシアの個性との齟齬であった。そして、スカルノは、以下のように述べて、インドネシアの個性の本質に帰ること、つまり1945年憲法への復帰によって両者の齟齬を解消するように促すのである。

1945年8月17日の独立宣言の本質とは何であるか。その本質は、インドネシア民族が不可分の巨大な家族として、その領域がサバンからメラウケまでに及ぶインドネシア共和国と呼称される家庭で暮らしたいということである。かくして、ゴトン・ロヨン内閣を組織しようとの私の提唱は、事実上、われわれの個性の本質に復帰することを意味するにすぎない。(日本インドネシア協会 1965: 420)

次に同年1957年の独立記念日演説「決定の年」をみてみよう。同演説では、スカルノは、自由主義や資本主義によってインドネシア民族の「伝統」であるゴトン・ロヨンが破壊されたと述べる。そして、ほんらい、インドネシア人がゴトン・ロヨンの国民であるにもかかわらず、これを見失っているという認識を次のように示す。

われわれの精神的弱点とは、民族としてのわれわれ自身に対する自信を欠き、そのために外国模倣の民族となっていること、われわれはほんらいゴトン・ロヨンの国民であるのに相互の信頼を欠いていること、剛健な精神を失いすぐに享楽を求め、安逸にまかせてしまうことにある。(Soekarno 1965: 284)

そして、スカルノは1959年7月に大統領に強大な権限を与えていた1945年憲法への復帰をはたす大統領令を発令する。これによって、議会制民主主義は完全に否定され、「指導される民主主義」が高く掲げられ、同体制は1965年9月30日のインドネシア共産党9・30事件まで継続することになる<sup>7)</sup>。

スカルノは、この大統領令の2ヶ月後に、1959年の独立記念日演説「わが革命の再発見」を行った。同演説では、ゴトン・ロヨンについて、1945年の

「パンチャシラの誕生」での言及をふりかえりながら、その内容をさらに展開している。この「わが革命の再発見」は、スカルノが「指導される民主主義」の正当性をゴトン・ロヨンによってはかる軌跡がもっとも鮮明にあらわれている演説となっている。そして、同演説は、「政治宣言」(Manifest Politik = Manipol)として、のちに国政の基本方針として採択されるなど、スカルノの「指導される民主主義」体制を政策的に基礎づけた演説にもなった。同演説では、1945年憲法復帰によるインドネシアの政治・経済・社会の「再秩序化」と「再編成」が主題となっており、スカルノは次のようにゴトン・ロヨンを引用する。

社会意識のあらわれとは、団結 (persatuan) であり、ゴトン・ロヨンである。これは私がよぶところの「みんなそろっていっしょに」(hoplois kuntul baris) の精神である。これは、公正で繁栄する社会を実現するための絶対条件である。しかし、革命の世界を置き去りにし、インドネシア連邦共和国憲法、1950年憲法の領域に入ってから以来のわれわれはどうであったか。自由主義はわれわれの社会意識を毒し、個人主義はわれわれの団結の結合力、ゴトン・ロヨン精神、「みんなそろっていっしょに」の精神に亀裂を生じさせた。その結果、われわれは、地方主義 (daerahisme) の癌、種族主義 (sukuisme) の癌、多政党主義 (multipartaiisme) の癌、グループ主義 (golonganisme) の癌などがはびこる民族のひとつになってしまった。(Soekarno 1965 : 373)

ここで、スカルノは、西欧型の議会制民主主義を採用した1950年暫定憲法以降のインドネシアのあり方を問う。そして、自由主義や個人主義を基礎とする1950年暫定憲法の採用が、インドネシア国民の社会意識を毒し、団結力とゴトン・ロヨンの精神に亀裂を生じさせたと論難している。それでは、スカルノが主張する1950年暫定憲法から1945年憲法への回帰は、どのような論理で正当化されうるのだろうか。次に、スカルノが、ゴトン・ロヨンとともに頻繁に言及 (Weatherbee 1966 : 27-8) した「協議」(musyawarah) と「全会一致」(mufakat) についてみてみよう。



### 3. 「伝統」の準則：「協議」と「全会一致」

スカルノは、1950年暫定憲法を激しく非難したあとで、大統領にきわめて強大な権限を与えた1945年憲法への回帰を以下のように正当化する。

1945年憲法は、独裁するのではなく、指導し、保護する首長（Sesepu）の手中にある1つの中央権威の指導のもとに、古来より「協議」と、「全会一致」というインドネシア固有の政治制度を純粹に反映したものである。インドネシア民主主義は古代から指導された民主主義であり、これはアジアにおけるあらゆる根源的民主主義の特性である。（Soekarno 1965：376）

スカルノは、1945年憲法への回帰がスカルノへの権力集中や独裁ではなく、インドネシア古来の共同体における「協議」と「全会一致」という固有の政治制度を純粹に反映したものだと述べている。その意味で、「協議」と「全会一致」とは「伝統」をささえる準則といえよう。

スカルノによれば、インドネシア民主主義、すなわち、「指導される民主主義」がインドネシア古代から継承されてきた政治制度であるだけでなく、アジア全体における民主主義の根源的な特性にまで高められている。このゴトン・ロヨンを実際の民主主義の根源的な特性とするスカルノの飛躍は、同じく、日本占領期に軍政当局がゴトン・ロヨンを「東洋精神の精髓」（ジャワ・バル 1944.6.1）とした飛躍ときわめて同質的である。

しかし、いうまでもなく、スカルノが示した「協議」と「全会一致」という「伝統」の準則は、徹底した「協議」によって最終的に「全会一致」を導くという前提には立脚してはいない。つまり、ハーバーマスのいう意味での「コミュニケーション的行為」（Habermas [1965] 1985 = 1985, 1986, 1987）の理念的な帰結ははじめから想定されてはいない。したがって、ジャワにおける「協議」と「全会一致」とは、もともと互いに背反することばである。では、この背反はどのように克服されるのだろうか。



クンチャラニングラットによれば、この両者の背反は、指導性の美德によって異なるさまざまな意見をまとめあげること、または、対立する意見を新しい概念として一元化させることのできる卓越した想像力をもつ人格の存在によって克服される（Koentjaraningrat 1967：397）。この、指導性の美德と卓越した想像力を兼備する人格の存在とは、「対立物を統合する伝統的なジャワの王権思想」（中島 1993：39；47）を背景にしている。

アンダーソンは、ジャワにおける権力をめぐる概念は西欧のそれとは著しく異なると述べている。アンダーソンによればジャワの権力とは「具体的で、同質的で、総量が一定とみなし、かつそれ固有の道徳的意味を含んでいないもの」（Anderson 1990=1995：38）である。つまり、ジャワの権力概念とは亘明志のことばをかりれば、「ネイティヴ・カテゴリー」に属するものである（亘 1996：179-81）。この「ネイティヴ・カテゴリー」に属するジャワの王権思想を背景にした指導性の美德と卓越した想像力を兼備する人格とは、スカルノが示した「指導し、保護する首長」にほかならない。そして、いうまでもなく、それはスカルノ本人のことを意味している。

以上、みてきたように、スカルノはゴトン・ロヨンという「伝統」を、インドネシアの個性や本性へと還元し、擬人化<sup>8)</sup>することで、外在的な概念やスローガンではなく、インドネシア人の心性に宿りながらもいまだ顕現していない内在的な精神と定位した。したがって、1945年憲法への復帰や議会制民主主義から「指導される民主主義」への転換も、みな、このインドネシアの本来の個性や本性を湧出させ、発現させる営為として正当化がはかられていることがわかる<sup>9)</sup>。そして、この正当化は、終わりのなき革命の旗のもと、「指導される民主主義」体制を束ねる指導者スカルノの英知によって、インドネシア人の心性に宿る個性や精神が初めて十全に顕現されるという構図の上に成立していたのである。

こうして、ゴトン・ロヨンという「伝統」はスカルノを巻きこんだ国内の政治諸勢力の権力闘争に決着をつけ、「指導される民主主義」の正当化のために、ギデنزの指摘どおり「さまざまな価値や生活様式の対立に決着をつける手段」（Giddens 1994=1997：195）となったのである。

ギデنزは「伝統」は「長い時間をかけて進化するばかりか、とつぜん変

質することもありうる」(Giddens 1999 = 2001 : 86) と述べている。スカルノが鼓吹したゴトン・ロヨンという「伝統」も、「指導される民主主義」を正当化するために、「パンチャシラの誕生」で示された了解性をたたえた国家原理としてのゴトン・ロヨンから権力性を伏在させた「政治スローガン」(楯沢 2003 : 147) に「とつぜん変質」した。しかし、「指導される民主主義」を正当化するために捏造がくわえられ、権力性が伏在することで質的には変容したゴトン・ロヨンという「伝統」も、あくまでも了解性をたたえたストーリーによって鼓吹されていた。スカルノの演説の内容が示しているように、スカルノが強く志向する「指導される民主主義」への移行は、インドネシアの個性や本性への回帰というさまざまな社会諸勢力の了解性を喚起する「伝統」の語りによってきわめて精妙に行われたのである<sup>10)</sup>。

#### 4. 都市の社会空間の政治化—ジャカルタ市長・スディロによる「伝統」の復興

スカルノが、ゴトン・ロヨンという「伝統」を、新生国家の団結を説く広義のスローガンとしてではなく、激しい権力闘争に終止符を打ち、「指導される民主主義」を正当化する文脈のなかで引用するようになった1953年当時、首都ジャカルタでは、「伝統」はどのように語られていたのだろうか。ここでは、ジャカルタ市長・スディロが、住民組織 Rukun Tetangga と Rukun Kampung (以下、RT/RK)<sup>11)</sup> の再整備に際して「伝統」の復興を訴えた史実に焦点をあててみよう。

##### (1) RT/RK の再整備

既述のように、インドネシアの独立揺籃期の政治状況は混乱していた。首都ジャカルタの市政も、この政治的混乱の影響で紆余曲折を経験した<sup>12)</sup>。1950年に単一のインドネシア共和国が発足し、国内が安定すると、大量の移住者が首都ジャカルタに流入した。これによって、ジャカルタでは1945年に62万3000人だった人口が、1950年には2倍の143万2000人、1953年には約3倍の179万5000人に急激に増大した (Sedyawati et al. 1987 : 29)。これによ

って、ジャカルタ市政府は急激な人口流入にともなう諸問題や市政業務の肥大化に直面することになった。そのため、ジャカルタ市政府は、住民の管理や統括を容易にし、市政府の業務を補完するような装置が必要となっていた。また、1955年総選挙の実施を前にさまざまな準備が行われていた時期でもあった。それゆえ、総選挙実施にあたっては、非識字者が多いなかで総選挙の実施や有権者登録<sup>13)</sup>の住民への告知や、有権者登録の効率的な方法が案件として浮上していた。これらの状況に対して、1953年から市長職にあったスディロは、必ずしも十全に機能していなかった既存の住民組織 RT/RK (*Madjalah Kotapradja* 1955.11.30) を再整備して活用することを決定した<sup>14)</sup>。

スディロは1954年5月20日を期して RT/RK を設置するように市政に対して指令を出した (*Bintang Timur* 1954.5.14)。そして、スディロはこの指令の前日の5月19日にラジオ演説を行い、ジャカルタ市民に RT/RK 設置を呼びかけた<sup>15)</sup>。ここでその一部を引用してみよう。

ゴトン・ロヨンの気風といっても、じっさい、このジャカルタのような大都市では、個人主義の気風は容易に出現し流行します。ですから、ゴトン・ロヨンの精神は、私たちがよみがえらせ、守り、活性化させなければなりません。

この認識にもとづいて、私たちは、RT/RK という組織を通じて、高貴な精神をいきわたらせることを、ジャカルタ市の全住民のみなさまに提案いたします。なぜなら、独自のエネルギーを持つインドネシア共和国の首都として、できるだけ早く社会の向上を達成するためには、RT/RK は政府にとってだけでなく、すべての市民にとっても大きな力となるからです。したがって、RT/RK は、政府とより緊密な関係を築くことになるでしょう。(*Madjalah Kotpradja* 1955.6.1)

この演説で重要なのは、大都市ジャカルタではすでにゴトン・ロヨンの精神が風化し、個人主義が蔓延しているという認識をスディロが示している点である。スディロは、RT/RK という住民組織の再整備をとおして住民のな

かにゴトン・ロヨンというインドネシアの「伝統」の精神を復活させようとしたのである。この住民組織の再整備とは、RT/RKを通して首都ジャカルタの近隣社会に、「伝統」の実践の場を確保するところみにほかならない。スディロはこれ以降、RT/RKの再整備にあたって、さかんにゴトン・ロヨンの重要性に言及していく（Pemerintah Daerah Khusus Ibukota Jakarta 1997 : 97）。

## (2) スカルノの「寵児」スディロ

スディロが、ジャカルタでRT/RKという住民組織の再整備にあたって、ゴトン・ロヨンという「伝統」の復興に言及した背景には、オランダ植民地時代以来の政治的経歴とスカルノとの密接な関係にあると推論できる。

スディロは1911年に中部ジャワのジョグジャカルタに生まれた。したがって、1901年生まれのスカルノとはちょうど10歳の年齢差があることになる。スディロは、ヨング・ジャワでジョグジャカルタ支部の幹部会員（1925～28年）、インドネシア・ムダでマゲラン支部の支部長（1929～31年）を務めるなど、はやくから民族運動に身を投じていた。また、民族運動以外にも、マディウンの高等小学校校長（1931～33年）や、タマン・シスワ学校のマディウン支部議長（1933～36年）などの経歴も積んでいる（Sudiro 1986 : 589）。

スディロが回想しているように、スカルノがインドネシア党（Partai Indonesia）<sup>16)</sup>の総裁に就任した1932年以来、スディロはスカルノの「従者または側近」（pengikut dan pembantu dekat）を自認していた。そして、インドネシア党では、スディロは中部ジャワ南部方面事務局長と党中央の幹部を兼任していた。周囲の人びとのなかには、当時のスカルノとスディロの密接な関係から、スディロのことをスカルノの「寵児」（anak emas）と呼ぶものさえあった（Sudiro 1986 : 232）。

スディロは、日本占領期には、ジャワ奉公会の中央本部長であり、奉公推進隊の最高指揮官だったスカルノ<sup>17)</sup>自身の任命によって、ジャワ奉公会の奉公推進隊（Barisan Pelopor）の幹部と特別奉公推進隊（Barisan Pelopor Istimewa）の隊長を兼務した（Sudiro 1986 : 143, 589）。奉公推進隊は17～25歳の男子から構成され、日本軍政当局が導入した青年団や警防団に類似し

ていたが、民族主義的な性格によって特徴づけられた組織であった（Kanahele 1967 = 1976 : 253-4）。一方の特別奉公推進隊は、奉公推進隊のなかから選抜された約100名の青年からなっていた。スディロは特別奉公推進隊の隊長として、スカルノの護衛や使者を務めた（Anderson 1972 : 48）<sup>18)</sup>。また、スカルノはスディロに対して奉公推進隊の指導部の人選を一任している（Sudiro 1986 : 143）ことからすると、スカルノのスディロに対する信頼はきわめて厚かったと判断できる。

スディロが幹部を務めたジャワ奉公会は、日本の大政翼賛会を模して結成され、日本占領期における「大衆動員のための最も広範な組織」（倉沢 1992 : 334）であった。また、ジャワ奉公会の組織は、中央から地方の村落部にまで垂直に広がり、末端の隣組制度と直結していた（Anderson 1961 : 45 ; Kanahele 1967 = 1977 : 219）。つまり、中央や地方を統括するジャワ奉公会と地域の末端に導入された隣組は大衆動員のための両輪として機能していたのである。

では、スディロが幹部として参画したジャワ奉公会はどのような指導理念に依拠していたのだろうか。ここでは、『ジャワ・バル』誌の「実践活動に入ったジャワ奉公会」という論説記事<sup>19)</sup>から、以下にジャワ奉公会の指導理念を確認してみよう。

ジャワ奉公会の指導理念とする所は日本臣道に所謂、奉公精神にあるは云ふを俟たない。奉公精神とは、至高至聖に対する滅私奉公を意味し、日本歴史を貫く大和魂の真髄であつて、日本臣道の根幹であると共に、東洋精神の精華とも云ひ得るものである<sup>20)</sup>。

ジャワに於て長き歴史の幾變動にも拘らず、住民の生活の中に今日に至るまで堅持された、ゴッ<sup>マ</sup>トン・ロ<sup>マ</sup>ヨンの精神こそは、この精神と揆を一にするものである、自然発生的な実践奉公精神とも云ひ得るものである<sup>21)</sup>。（ジャワ・バル 1944.6.1）

『ジャワ・バル』誌の論説では、ジャワ奉公会の指導理念を日本の臣道に連なる奉公精神と位置づけている。そして、この奉公精神とは至高至聖に対

する滅私奉公を意味するものであった。ここで、重要な点は、ほんらい日本の「大和魂の精髓」または「日本臣道の根幹」とされる奉公精神が「東洋精神の精華」と定義されていることである。そして、さらにこの飛躍ともよぶべき定義は、ジャワで歴史の挑戦を受けながらもひとびとの間で堅持されてきた「伝統」であるゴトン・ロヨンが、日本の「大和魂の精髓」や「日本臣道の根幹」、または「東洋精神の精華」である奉公精神と「揆を一にする」とまで敷衍されている。

スディロは、ジャワ奉公会のなかでも、ジャワのひとびとを動員する最前線にいた奉公推進隊と特別奉公推進隊の中心者であった。したがって、スディロは、日本占領期における経験や立場から、上述のような「伝統」の問いかけによって大衆の動員をはかるメカニズムをスカルノとともに観察していたと考えられる<sup>22)</sup>。

以上、みてきたように、スカルノが「指導される民主主義」体制の正当化のために、「伝統」を同体制に適合的に書き換えていたとき、首都ジャカルタでも、スカルノの「寵児」スディロによって、RT/RKの再整備に際して「伝統」の復興が叫ばれていたことが確認できた。このスディロの「伝統」の復興は、「指導される民主主義」と親和的な価値観を首都ジャカルタの近隣社会に浸透させようとする「都市の社会空間の政治化」ともいうべきころみといえよう。

## 5. スカルノによる都市空間の政治化

スカルノの腹心であったスディロは、市長として首都ジャカルタの「都市の社会空間の政治化」をこころみていた。では、スカルノは首都ジャカルタ<sup>23)</sup>に対してどのような営為をなしていたのだろうか。

### (1) 「象徴の操作」

フィースは、「指導される民主主義」体制移行後のインドネシア政府が、象徴、儀式、説教という形式に多大な関心を払っていたと述べている。そして、その関心は、目的にいたるまでの形成や宣言、または、目的を達成する

ための力となる儀礼的な証明に集中していた (Feith 1963 : 383-4)。つまり、「指導される民主主義」体制の政治様式では、目的にいたるまでの象徴や儀式、または、目的を達成するための決意をとうとうと熱弁するという形式が重要視されたのである。このような政治様式は、「存在」と「当為」の論理的な区別をあいまいにし、いきおい理想主義的な言説を多く生みだす源泉にもなる<sup>24)</sup>。

フィースは、とくにスカルノの「象徴を操る者」と「団結を演出する者」という2つの資質に着目している (Feith 1962)。クリフォード・ギアツは、このフィースの指摘を援用して、スカルノが「指導される民主主義」体制で創りあげた政治様式を「劇場国家の現代版」(Geertz [1968] 1971 : 86) とよび、とくに、スカルノの国民に対する象徴操作の機制を論じている。スカルノが国家の対面やじぶんのスタイルというものを非常に気にして、国民や世界からどう見られるかについてつねに気を配りつづけていた (後藤 2001 : 188) 理由はこの象徴操作のためである。そして、スカルノが象徴操作のひとつとして行なったものが、首都ジャカルタの都市空間を装飾して、みずからの政治体制に適合的に国民を導くことであった。

スカルノは大統領在任中、頻繁に外遊を行なった。外遊先でスカルノが各国の指導者と握手し、談笑する姿が新聞・雑誌・テレビなどの各種メディアで伝えられた。外遊先の市民は、オランダ、日本から5千万人のインドネシア国民を開放した「独立の父」として、スカルノを歓迎した。外国で国賓として迎えられるスカルノを、インドネシア国民は憧憬のまなざしで熱狂的に支持した。スカルノにとっては、外遊も、象徴操作のための大きな演出の舞台となったのである。

スカルノは各国に滞在中、首都をはじめとする都市に計画的に美しく配置されたさまざまな施設や記念碑などに視線を投げかけていた。たとえば、スカルノは、1956年5月4日から7月7日まで約2ヶ月もの長期にわたって外遊に向かい、アメリカ、カナダ、イタリア、西ドイツ (当時)、スイスを歴訪した。最初の訪問国のアメリカでは、首都ワシントン DC のナショナル・モール、ニューヨークの国連ビル、サンフランシスコの金門橋、各地の記念碑、ディズニーランドなどを訪れた。その後、スカルノは、ローマ、ボン、



ハイデルブルグ、ジェノアなどのヨーロッパ各国の首都や国際都市に足を運んでいる。スカルノは、訪問した都市の空間に配置された壮麗な建造物から、各国の「歴史」の象徴を読み取った。そして、帰国後、スカルノは、外遊先の首都や各都市で観た都市空間に配置された美しい建造物の「歴史」の象徴の意味を、政治的な意図をもって復元していく（Ardhiati 2005 : 175, Fakin 2005 : 58-66）。こうして、首都ジャカルタは「指導される民主主義」に適合するかたちでスカルノによって「創造」されていくのである。

## (2) 都市空間の「創造」

ルフェーブルがいうように「都市はおびただしい数の個々の芸術作品を包みこんだひとつの壮大な芸術作品」（Lefebvre 1974=2000 : 403）である。では、スカルノは象徴操作のためにジャカルタをどのような芸術作品に仕立てのだろうか。

スカルノは、1959年に1945年憲法に復帰する大統領令を発令して「指導される民主主義」体制に完全に移行すると、みずからの指示によって首都ジャカルタでさまざまな彫像の建設や都市基盤の整備を推進した。スカルノにとって、首都ジャカルタは特別な意味をもっていた。なぜなら、スカルノは「国家の繁栄は首都の卓越性に由来し、首都の卓越性は首都のエリートのすぐれた才気に由来し、エリートのすぐれた才気は統治者の靈性に由来する」（Geertz [1968] 1971 : 86）と考えていたからである。ゆえに、スカルノは、植民地時代と完全に決別した独立国家インドネシアの真の首都にふさわしい象徴をつくることを課題としていた（Leclerc 1997 : 206）。そして、スカルノは、ジャカルタに独立国家インドネシアの首都としての威容を「創造」し、統治者としての靈性を誇示するために、首都ジャカルタの都市空間をみずからが志向する政治体制に適合的に装飾しはじめたのである。藤田が指摘しているように「首都の中心部には、どこでも記念碑的建造物が林立している」（藤田 1993 : 96）。では、スカルノは首都ジャカルタにどのような記念碑的建造物を造営したのかをみていこう。

たとえば、スカルノは、首都ジャカルタに巨大なモスク、巨大な競技場、民族指導者の彫像、独立記念塔（MONAS）などを明確な政治的意図をもつ

て建造した（Anderson 1973：61-3）。そして、独立記念塔から南方に降りてくるジャカルタの幹線道路には、国軍の父とよばれる独立戦争の闘士スデイルマンや民族指導者タムリンの名前が冠された。これらは、スカルノが追いつけた「革命のロマンティシズム」（Soekarno 1965：399）の象徴をジャカルタの都市空間のあちらこちらに立体的に再現し、ジャカルタ市民たちに偉大な革命を追体験させるものであった。

ジャカルタ市民は、これらの革命を象徴する建造物の荘厳さや壮麗さから、スカルノが追い求めた「革命のロマンティシズム」というメッセージを受けとった。そして、この「首都の卓越さ」を終わりにき「革命のロマンティシズム」と同列に置くスカルノの象徴操作によって、ジャカルタ市民、ひいては、インドネシア国民は、「首都の卓越性」が「統治者の霊性」、つまり、スカルノの指導性の崇高さを源泉としていることを学んだ。

しかし「指導される民主主義」体制下で新たに威容をあらわした多くの施設は外国からの借款によって建設された。当時のジャカルタ市の財政がきわめて悪化していた（Kotapradja Djakarta Raja 1958：176-7）からである。たとえば、独立後、最初の近代的ホテルであったホテル・インドネシアは日本、アジア競技大会に使用する複合施設はロシア、ジャカルタの高速バイパス道路はアメリカの借款によって建設された（Abeyasekere [1987] 1989：178）。また、ジャカルタ市の年間予算の半分は国庫から支出されていた（Kotapradja Djakarta Raja 1958：177）。では、なぜ、こうもしてまで、スカルノは「首都の卓越性」をつくりあげる必要があったのだろうか。

マンフォードがいうように、権威の集中には首都の「創出」を必要とする。そして、首都は国家の一体化に大きな貢献をする（Mumford 1938：79）。スカルノは、さまざまな施設を建築することによって首都を「創出」し、「指導される民主主義」を志向する国家の一体化をはかったのである。

スカルノは、みずからの権威を集中させるために象徴操作によって都市空間を政治化することをこころみた。そして、都市空間のなかに終わりにき革命を象徴する建造物を数多く配置することで、スカルノに強大な権力や権威を付与する「指導される民主主義」体制の正当性を視覚的に演出したのである。

## 結 語

スカルノがインドネシア国内と首都ジャカルタをみずからの権力の掌中にほぼ完全におさめ、支配できるようになった時期は、「指導される民主主義」体制への移行期である1957年から1959年にかけてであった(Abeyasekere [1987] 1989 : 167)。このことを本論に引き寄せていえば、同期間以前の1953年に、スカルノは、「指導される民主主義」体制の正当化のために、「伝統」を同体制に適合的に書き換えはじめていた。また、それと軌を一にして、1954年にはスカルノの「従者または側近」(Sudiro 1986 : 232)を自認するジャカルタ市長スディロは、RT/RKの整備<sup>25)</sup>をとおして「指導される民主主義」と親和的な価値観を首都ジャカルタの近隣社会に浸透させようとする「都市の社会空間の政治化」を行った。さらに、スカルノは、みずからの権威を集中させるために象徴操作の「創造」によって首都ジャカルタの都市空間を政治化した。

このように考えていくと、ジャカルタで「伝統」の復興がスカルノの「寵児」スディロによって推進された意味がおのずと理解されよう。したがって、スディロによる「伝統」の復興とは、「指導される民主主義」体制への移行を目前にして、「指導される民主主義」に適合的なゴトン・ロヨンという「伝統」を、首都ジャカルタの都市住民たちにあらかじめ鼓吹する営為であったとみることができる。また、このことは首都ジャカルタの社会空間のなかに、ゴトン・ロヨンという「伝統」を実践する「場」を再編する歴史的契機を与えた。この「伝統」が実践される「場」の再編は、「指導される民主主義」をゴトン・ロヨンとともにささえた準則である「協議」と「全会一致」という理念的な概念が実践される機会を、RT/RKという都市の地域コミュニティのなかにあらかじめ確保するところともいえる。

こうして、首都ジャカルタは「指導される民主主義」体制の移行に前後して、社会空間の政治化と、都市空間の政治化という2つの歴史的局面を経験した。この社会空間と都市空間の政治化によって、首都ジャカルタは文字どおり「スカルノのための完全な媒体」(Abeyasekere [1987] 1989 : 167)とな

ったのである。

〈注〉

- 1) 「指導される民主主義」(demokrasi terpimpin) とは、英知に導かれた民主主義を唱導するスカルノにきわめて大きな独裁権が与えられた政治体制をいう。法制度的には、1959年7月の「1945年憲法への復帰に関する大統領布告」によって、1950年暫定憲法の廃止と制憲議会の解散が決定された。これにより、インドネシアは大統領に強大な権限を与えていた1945年憲法へ復帰した。この後、大統領が首相を兼務する内閣が政権を担う実務内閣 (Kabinet Kerja) が発足した。
- 2) インドネシアにおける1950年代の議会制民主主義は、国内問題に対する閣内の意見対立などから、政権はいずれも2年以下の短命に終わったが、ハッタ (Hatta) から、ナッシル (Natsir)、スキマン (Sukiman)、ウィロポ (Wilopo) までの4内閣では、議会制民主主義は制度手続上機能しており、各内閣は議会に対して一定の説明責任をはたしていた (Feith 1962 : 314)。
- 3) 「10月17日事件」は、1952年7月頃から議会でもとりあげられていた陸軍の合理化問題をめぐって、国民党と共産党、マシュミと社会党が対立し、合理化を推進した軍の一部がクーデターを企図して失敗に終わった事件であった (日本国際問題研究所・インドネシア部会編 1972 : 589)。
- 4) ジョージ・ケーヒンは、もともと、インドネシアの農村社会に限定して用いられていたゴトン・ロヨンという用語が、スカルノをはじめとする政治指導者たちによって国家の問題と結びつけて頻繁に引用された1950年代の時代状況を見据えて「インドネシア語のなかで、もっとも重要であると同時に、もっとも乱用されている用語のひとつがゴトン・ロヨンである」(Kahin 1961 : iii) という見解を述べている。ケーヒンの視線がとらえていた1950年代のインドネシアは、議会制民主主義と「指導される民主主義」という制度的に大きく異なる2つの政治体制を経験した。ケーヒンの見解は、ゴトン・ロヨンという「伝統」が、この2つの政治体制の移行と軌を一にして、変容したことを示唆している。
- 5) この「伝統」のストーリーの急変は、ウィロポ内閣の総辞職後に、第1次アリ・サストロアミジョヨ (Ali Sastroamidjojo) 内閣が誕生して「これまでの4つの歴代内閣の政治姿勢にみられた継続性が崩壊」(Feith 1962 : 315) していく過程と軌を一にしていた。
- 6) 内閣の正式名称は実務内閣 (Kabinet Kerja) であった。また、国会の名称としても用いられた。これはゴトン・ロヨン国会 (DPR Gotong Royong) と命名された。
- 7) 1957年11月のスカルノ暗殺未遂事件を契機として、オランダ企業のインドネシア接収問題に対する政策の対立は、ついにはスマトラにインドネシア共和国革命政

府を誕生させ、中央政府との武力闘争を招いていた。この武力闘争は、国軍の政治介入の糸口となり、インドネシア共産党の躍進ともあいまって、政党政治の再編が迫られていた。(日本国際問題研究所 インドネシア部会編 1972: 589)。「指導される民主主義」を採用する経緯は、多く政党の合従連衡に起因する権力闘争のほかにも以上のような背景があった。

- 8) 1948年の独立記念日演説では「共和国は、インドネシア全国民の独立理想の化身であり具現であり、凝結体である」(Soekarno 1948 = 1965: 67)と語っている。また、1959年の独立記念日演説でも「パンチャシラとはインドネシア国民の本性の化身」(Soekarno 1959)と位置づけている。
- 9) ゴトン・ロヨンは、1960年代に入ると、国民戦線の設立による国家総動員体制の必要性、西イリアン解放をめぐるオランダとの闘争やマレーシア対決にみられる反帝国主義・反植民地主義を鼓吹する文脈でも引用されるようになっていった。
- 10) ゴトン・ロヨンという「伝統」化を考察するうえでは、インドネシアの多文化状況をふまえたヒルドレッド・ギアツのスカルノ時代における以下の言説はきわめて示唆的である。

インドネシアが現代世界において自立した不可欠の構成要素として生き残るためには、地域コミュニティの形態とアイデンティティーの多様性に同時に基礎をおくような新しい国家組織と、凝集性のある国家アイデンティティーをみずからがつくりださなければならない。(Geertz 1963: 96)。

- 11) Rukun Tetanggaは隣組、Rukun Kampungは町内会に相当する。RT/RKの設置を定めた「規約」によれば、「RTは10から20の世帯から構成されます。また、RKはひとつのカンブンのRTの連合から構成されます」(*Madjalah Kotopradja* 1955. 6. 1)とある。
- 12) 1945年8月17日の独立宣言によって、日本占領期のジャカルタ特別市はジャカルタ市国家政府(Pemerintahan Nasional Kota Jakarta)と改名された。そして、ジャカルタ特別市で第一助役を務め、また、独立宣言の挙行式で実行委員長の任にもあたったスウィルジョ(Suwirjo)がスカルノから同年9月29日に初代市長に任命された[Pemerintah Daerah Khusus Ibukota Jakarta 1977, 4-5]。しかし、オランダ領東インド民政府(NICA)の反乱によってジャカルタの治安は不安定となり、1946年1月には首都がジョグジャカルタに移された。また、翌年1947年7月21日にはオランダの第一次軍事行動によってジャカルタが制圧され、スウィルジョ市長はじめ何人かの官僚が逮捕された[The 1958, 117]。この後、既述の1949年12月27日の「ハーグ協定」を経て、インドネシア連邦共和国が発足し、首都はふたたびジャカルタに戻った。そして、1950年3月1日にはジャカルタ市政府協議会(Majelis Pemerintahan Kota Jakarta)と一日政府機関(Badan Pemerintah Harian)が設置され、同年3月30日からはスウィルジョが市長に復帰した。

- 13) 同総選挙の実施を前にして、1954年5月から同年11月まで有権者登録が行われ、インドネシア全土であわせて4310万4464名が登録した (Feith 1957: 5)。スディロは「ジャカルタでは、RT/RK 有権者登録の主要な場所となった」と証言している (Pemerintah DKI Jakarta 1977a: 131)。
- 14) RT/RK の整備にいたる状況の側面は「戦時下で異常に仕事量の膨れあがった村落の行政を助ける組織」(倉沢 1992: 247) として日本占領期のジャワで隣組・字常会が導入された背景と通底しているといえよう。
- 15) スディロのラジオ演説は *Madjalah Kotapradja* 誌1954年6月1日号 pp18-9 に全文が掲載されている。
- 16) 1931年4月にサルトノはインドネシア国民党の綱領を継承してバルティンドを発足させた。しかし、サルトノを解党主義として批判する旧党員はバルティンドに参加せず、1931年末にシャフリルの指導下でインドネシア国民教育教会を結成して対抗した。1931年末に入獄したスカルノがバルティンドに、1932年にオランダから帰国したハッタがインドネシア国民教育教会に加わったことから、両党の論争が激化した。バルティンドは1936年11月に解散した (土屋 1991: 349)。
- 17) 日本占領期初期には、スディロは、南スマトラの学校で日本語教員としてインドネシア人の学校教師や企業職員に日本語を教えていた。そして、1943年末に、スカルノは、当時指導的な立場にあった民衆総力結集運動にスディロを参画させるためにスディロをジャカルタに呼び寄せる電報を送っている (Sudiro 1986: 141)。
- 18) 日本占領期に発行されていた「アジア・ラヤ」紙の記者だったロシハン・アンワルは、1944年初めに西ジャワのチュルグで行われた「勤労奉仕」の状況について回想している。アンワルによれば、「勤労奉仕」をスカルノが指導していたが、スディロは特別奉公推進隊長としてスカルノに同行し、スカルノのすぐ隣に立っていたという (Anwar 2002: 24)。
- 19) この論説記事は、*Kan Po* に掲載された軍政監・国分新七郎の「新住民奉公組織設立に関する軍政監説明」(*Kan Po* No. 34: 13) や総務部長・山本茂一郎の「新住民奉公組織設立に関する総務部長演説」(*Kan Po* No. 34: 22) の内容を簡略化したものと思われる。
- 20) この文章は、軍政監・国分新七郎の「新住民奉公組織設立に関する軍政監説明」(*Kan Po* No. 34: 13) を簡略化したものである。
- 21) この文章は、総務部長・山本茂一郎の「新住民奉公組織設立に関する総務部長演説」(*Kan Po* No. 34: 22) を簡略化したものである。
- 22) RT/RK の「規約」第2条「意義と目的」には以下の条文がある。  
「RTとルクン・カンブンは、ゴトン・ロヨンの精神を発展させ、保持するため、また、すべての住民の繁栄、教育 (ketjerdasan)、福祉を達成することをめざし、市民一般を活動化させる (menggerakkan) ために設置される」(*Madjalah*



*Kotpradja* 1955.6.1)。

- 23) ジャカルタ以外の諸都市もスカルノによって「創造」されていく経緯が認められる (Ardhiati 2005; Husain 2010)
- 24) 本岡武も、インドネシア人の思考様式にとって「存在」と「当為」の区別が明らかでないことがあると述べている (本岡 1975: 12-3, 268)。本岡は、スハルト新秩序体制の発足から間もない1968年から1970年までインドネシア農務省に顧問としてインドネシアに在勤しており、インドネシアの高官や官吏との接触も多かった。スカルノの「指導される民主主義」の影響がまだ完全に払拭されていなかった同時期にインドネシアにわたった本岡の上述の発言は、フィースの指摘した「指導される民主主義」体制における政治様式と通底するものといえよう。
- 25) ゴトン・ロヨンの復興をかかげたスディロによる RT/RK の整備に、スカルノが具体的にどこまで関与していたのかは不明である。しかし、スカルノの「従者または側近」(Sudiro 1986: 232) を自認するスディロが、まったくの一存で首都ジャカルタにおける RT/RK の整備を決定したとは考えにくい。これまで述べてきたスディロとスカルノの関係から推論すれば、少なくともスカルノの同意や支援のもとに RT/RK の整備が行われたとみて間違いないだろう。

#### 〈文献〉

- Abeyasekere, Susan [1987] 1989. *Jakarta: A History, Revised Edition*, Singapore, Oxford, and New York: Oxford University Press.
- Anderson, Benedict R. O'G., 1972. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-1946*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- , 1973, "Notes on Contemporary Indonesian Political Communication", *Indonesia* No.16: 39-80.
- , 1990, *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*, Ithaca and London: Cornell University Press. (=1995, 中島成久訳『言葉と権力—インドネシアの政治文化探求』日本エディタースクール出版部.)
- Anwar, Rosihan, 2002, *In Memoriam: Mengenang Yang Wafat*, Jakarta: Penerbit Buku Kompas.
- Ardhiati, Yuke, 2005, *Bung Karno Sang Arsitek: Kajian Arsitek Karya Arsitektur, Tata Ruang Kota, Interior, Kria, Simbol, Mode Busana dan Teks Pidato 1926-1965*, Jakarta: Komunitas Bambu.
- Fakih, Farabi, 2005, *Membayangkan Ibu Kota: Jakarta di Bawah Soekarno*, (『首都を描く—スカルノのジャカルタ』Yogyakarta: Ombak.
- , 1957, *The Indonesian Elections of 1955*. Ithaca: Modern Indonesia Project, Southeast Asia Program, Cornell University.



- , 1962, *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*, Ithaca and London: Cornell University Press.
- , 1963, Indonesia's Political Symbols and their Wielders, *World Politics*, 16 (1): 79-97.
- 藤田弘夫, 1993, 『都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするか』中央公論社.
- Geertz, Clifford, [1968] 1971, *Islam Observed: Religious Development in Morocco and Indonesia*, Chicago and London: University of Chicago Press. (=1973, 林武訳『2つのイスラーム社会—モロッコとインドネシア』岩波書店.)
- Geertz, Hildred, 1963, "Indonesian Cultures and Communities," Ruth Thomas McVey, ed., *Indonesia*, New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University by arrangement with HRAF Press, 24-96.
- Ghoshal, Baladas, 1982, *Indonesian Politics 1955-59: The Emergence of Guided Democracy*, Calcutta and New Delhi: K P Bagchi and Company.
- Giddens, Anthony, 1994, "Living in a Post-Traditional Society," In *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, ed. Beck, Ulrich, Anthony
- Giddens and Scott Lash. London: Polity Press, 56-109. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳「ポスト伝統社会に生きること」『再帰的近代化—近現代における政治, 伝統, 美的原理』而立書房 105-204).
- , 1999, *Runaway World: How Globalization is Reshaping Our Lives*, London: Profile Books. (=2001, 佐和隆光訳『暴走する世界—グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社).
- 後藤乾一, 2001, 「日本軍政とスカルノ」後藤乾一・山崎功『スカルノ—インドネシア「建国の父」と日本』吉川弘文館.
- 梶沢英雄, 2003, 「教育文化省による地方文化記録プロジェクトにおけるゴトン・ロヨン調査報告に関する一考察—東ジャワの事例」東京外大東南アジア学 8号: 147-53.
- Habermas, Jürgen, ——, [1965] 1985, *Theorie des kommunikativen Handelns*, (=1985, 川上・平井訳『コミュニケーション的行為の理論 上』, =1986, 藤澤・岩倉訳『コミュニケーション的行為の理論 中』=1987, 丸山・厚東訳『コミュニケーション的行為の理論 下』未来社.)
- Hobsbawm, Eric and Terrence Ranger, 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1992, 前川啓治・梶原景昭ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店.)
- Husain, Sarkawi B., 2011, Mereka Tidak Bisu: Makna dan Perebutan Simbol Mionumen, Patung, dan Tugu di Kota Surabaya, Abdullah, Taufik and Sukri Abdurrachman eds, *Indonesia across Orders: Arus Bawah Sejarah Bangsa*

- (1930-1950), Jakarta: LIPI: 3-35
- Kahin, George McTurnan, 1961, "Preface," Koentjaraningrat, *Some Social-Anthropological Observations on Gotong Royong Practices in Two Villages of Central Java*, Monograph Series, Modern Indonesia Project, Ithaca: Cornell University.
- Kanahele, George S., 1967, "The Japanese Occupation of Indonesia: Prelude to Independence," Ph.D. dissertation, Cornell University. (= 1977, 後藤乾一・近藤正臣・白石愛子訳『日本軍政とインドネシア独立』鳳出版.)
- Kementerian Penerangan, 1954, *Kepartaian dan Parleментарia Indonesia*.
- Koentjaraningrat, 1967, "The Village in Indonesia Today," Koentjaraningrat ed., *Villages in Indonesia*, Ithaca and London: Cornell University Press, 386-405.
- Kotapradja Djakarta Raja, 1958, *Sedjarah Pemerintahan Kota Djarta*.
- Leclerc, Jacques, 1997, "Jakarta in Sukarno's Image," Michael Hitchcock and Victor T. King eds., *Images of Malay-Indonesian Identity*, Kuala Lumpur: Oxford University Press, 203-8.
- Lefebvre, Henri, [1974] 2000, *La Production de l'espace*, Paris: Anthropos. (= 2000, 斎藤日出治訳『社会学の思想 5 空間の生産』青木書店.)
- Legge, John D., [1972] 2003, *Sukarno: A Political Biography*, 3<sup>rd</sup> edition, Singapore: Archipelago Press.
- Lev, Daniel S., 1966, *The Transition to Guided Democracy: Indonesian Politics, 1957-1959*, Cornell Modern Indonesia Project, Ithaca: Cornell University.
- 本岡武, 1975, 『東南アジア研究叢書 10 インドネシアの米—とくにビマス計画にかんする研究』創文社.
- Mumford, Lewis, 1938, *The Culture of Cities*, New York: Harcourt, Brace, Jovanovich. (= 1974, 生田勉訳『都市の文化』鹿島出版会.)
- 中島成久, 1993, 『ロロ・キドゥルの箱—ジャワの性・神話・政治』風響社.
- 日本国際問題研究所・インドネシア部会, 1972, 『インドネシア資料集 上 1945-1959』日本国際問題研究所.
- 日本インドネシア協会訳編, 1965, 『インドネシア革命の歩み: スカルノ大統領演説集』日本インドネシア協会・鹿島研究所
- Pemerintah Daerah Khusus Ibukota Jakarta, 1977, *Karya Jaya: Kenang-Kenangan Lima Kepala Daerah Jakarta 1945-1966*, Jakarta.
- Penders, C.L.M., 1979, *Milestones of My Journey: The Memories of Ali Sastroamijoyo, Indonesian Patriot and Political Leader*, ST. Lucia: University of Queensland Press.
- Sedyawati, Edi, Supratikno Rahardjo, Irmawati Marno Johan and G.A. Manilet-Ohorella 1987. *Sejarah Kota Jakarta 1950-1980*. Jakarta: Departemen Pendidikan

- dan Kebudayaan, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional, Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Sejarah Nasional.
- Soekarno, 1945 [1947], “Lahirnya Pancasila,” *Lahirnya Pancasila*, Yogyakarta: Guntur.
- , 1953 [1985], “Jadilah Alat Sejarah,” Yayasan Pendidikan Soekarno ed., *Amanat Proklamasi: Pidato Pada Ulang Tahun Proklamasi Kemerdekaan Indonesia, Jilid II 1951-1955*, Jakarta: Inti Idayu Press.
- , 1965, *Dibawah Bendera Revolusi*, Jilid II, Jakarta: Panitia Penerbit Dibawah Bendera Revolusi.
- Sudiro, 1986, *Pelangi Kehidupan: Kumpulan Karangan oleh Sudiro*, Jakarta: Inti Idayu Press.
- Sundhaussen, Ulf, 1982. *The Road to Power: Indonesian Military Politics 1945-1967*. Kuala Lumpur and New York: Oxford University Press.
- The, Liang Gie, 1958, *Sedjarah Pemerintahan Kota Djakarta*, Djakarta.
- 土屋健治, 1991, 『カルティニの風景』めこん.
- 亘明志, 1996, 「権力の記述と文体」井上・上野・大澤・見田・吉見編『岩波講座現代社会学 16 民族・国家・エスニシティ』岩波書店: 173-93.
- Weatherbee, Donald E., 1966, *Ideology in Indonesia: Sukarno's Indonesian Revolution* Monograph Series No.8, New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University.
- Willner, Ann Ruth, 1966, *The Neotraditional Accommodation to Political Independence: The Case of Indonesia*, Research Monograph No.26, Center of International Studies, Princeton University.

〈定期刊行物〉

Bintang Timur

ジャワ・バル

KanPo

Kotapradja

Majalah Kotapradja

Politicization of Social-Urban Space in Indonesia:  
The role of “Guided Democracy” in the Transformation of  
“Tradition” and “Creation” in the National Capital

KOBAYASHI Kazuo

**Abstract**

This paper examines the politicization of social-urban space in Indonesia by exploring the role of “Guided Democracy” in the transformation of “tradition” and “creation” in the national capital.

In 1953, President Soekarno began to transform the meaning of the *gotong royong* tradition in his speeches to justify his “Guided Democracy.” Subsequently, in 1954, Sudiro, Soekarno’s right-hand man since the VOC period and the then mayor of Jakarta, undertook the reorganization of the RT/RK neighborhood associations, wherein he tried to revitalize tradition. This reorganization of RT/RK, which was implemented by Sudiro, can be considered as the politicization of social space in Jakarta.

After that, Soekarno tried to decorate and construct facilities and buildings in the urban space in Jakarta to display his authority and dignity as the “Father of the Nation.” In addition, he appealed to citizens’ feelings to revive the revolutionary era and its leader. His subtle appeal aimed at “symbol manipulation” of himself as a President of Republic of Indonesia or as a great revolutionary leader. Through this manipulation, Soekarno tried to justify the transition from representative democracy to “Guided Democracy.” This symbolic manipulation of urban space in the capital can be considered as the politicization of urban space in Jakarta by Soekarno.

In conclusion, the politicization of social-urban space in Jakarta can be

regarded as two historical and contiguous events to and from “Guided Democracy.”

As a result of the politicization of social-urban space in Jakarta, Soekarno could take control of Jakarta as his “vehicle.”